

# 手稲高校放送局 OBOG会報

# ビデオ・アナが入賞!

江別市民会館で〇九年一

〇月八日・九日に行われた高文連放送コンテスト石狩地区大会で手稲高校放送局がビデオメッセージ部門とアナウンス部門でそれぞれ入賞した。順位はビデオメッセージが二三作品中八位、アナウンス部門が八〇人中一六位だった。どちらも入賞圏内ギリギリではあったが、放送室にやっと賞状が飾られることになった。

今回手稲高校放送局がビデオメッセージ部門に提出した作品は「お赤飯」について取りあげた。本州では小豆を入れるのになぜ北海道では甘納豆を入れるのか、そのルーツに迫る内容で、局員演じる「赤飯は小豆だ」という人と「赤飯に

は甘納豆だ」という人の二人のやりとりを挟みながら番組を進行するなど、伝え方や演出に工夫を凝らした。

一方でアナウンス部門でも二年生女子一名が入賞を果たした。内容は「ローンクもらい」という北海道で七夕に行われる行事について取りあげ、数年前はよく見かける光景が最近では見られなくなつたという点を紹介した。

局長のHさんは、今回の大会について、「いきなりすぎて皆で焦って、浮かれています。先輩方に感謝している」と振り返った。



今回の大会では、さまざまな部分でインフルエンザの影響が出た。特に閉会式

## 今後につなげて

興奮が少し収まったところで、少し開局から今までの歴史を振り返りたい。

実は現在の手稲高校放送局は二〇〇三年に再開された。それまで、局員数が不足していたために活動ができなかつたそうだ。

再開当初は機材も人もお金も「経験」もなかつた。当時の先輩たちは、メモリ一二八kbの非力なノートPCで、ムービーメーカーを使って映像の編集をしていたようである。また、発声練習の仕方なども手探りだったのである。

が簡略化され、全員の前で賞状を受け取ることができず、「表彰状を他人の前で受け取れないのが残念(局長)だった。

私が入局した二〇〇七年四月当時はいろいろな面で充実し始めていたいわば過渡期であった。機材面では初めての業務用カメラ、経験面では先輩が他校から「発声練習マニュアル」を譲り受け、局員全員分コピーしてくれた記憶もある。

私の代では、こうした恵まれた環境でさまざまな「試み」を行った。それらは失敗の連続ではじめての高文連でビデオメッセージはは最下位をとった。そして最後まで入賞を果たすことはできなかった。

しかし、いろいろな経験や経験に基づく指導を後輩にできる限りしてきたつもりである。それが今回の結果に結び付いたのかもしれない。

次は、先輩がさらに次の代へ技術をしっかりと継承する番だ!